

# 日本語学習者と日本人児童による指示詞コ・ソ・アの習得研究 — 穴埋めテストの調査結果に基づいて —

迫田 久美子  
(1993年9月10日受理)

On acquisition of Japanese demonstratives: KO, SO, A, by learners of Japanese and native children  
— Based on the results of a fill-in-the-blank task —

Kumiko Sakoda

The purpose of this study is to provide insight into the processes of L1 and L2 acquisition by investigating the acquisition of Japanese demonstratives by Japanese children and L2 learners. The data was gathered from a fill-in-the-blank-worksheet, completed by 473 subjects. The task required the subjects to write appropriate Japanese demonstratives in a dialogue, choosing one series from the three: KO, SO and A. The task involved 26 dialogues, involving 5 usages of Japanese demonstratives: i.e. 1) Deictic usage, 2) Simple-co-reference usage, 3) A-series anaphoric usage, 4) SO-series anaphoric usage, and 5) Conceptual & strategic usage.

The subjects comprised of two groups: native Japanese speakers and learners of Japanese. Native Japanese speakers were divided into 4 sub-groups: 1st, 3rd, 6th graders of elementary school and adults. The L2 learners were divided into 2 sub-groups: intermediate and advanced level learners.

The findings indicate that:

- ① The Japanese children almost have acquired the Deictic usage until the 3rd grade and the Conceptual & strategic usage until the 6th grade, however, they haven't completed acquiring the Simple-coreference usage, the A-series anaphoric usage and the SO-series anaphoric usage yet even on the 6th grade in elementary school.
- ② The L2 learners of both levels almost acquired the Deictic usage, however, they haven't acquired non-deictic usages yet.
- ③ The intermediate level learners have much difficulties to acquire the Conceptual & strategic usage, however, the advanced level learners they have made a great progress to acquire it.
- ④ The L2 learners have made a least progress to acquire the Anaphoric usages of A-series and SO-series. The learners have still difficulties to choose A-series or SO-series even in the advanced level.
- ⑤ The acquisition level of the advanced learners is almost the same as that of the 3rd grade of Japanese children as for non-deictic usages, while that of the intermediate learners the same as the 1st graders as for the Simple-coreference usage and the Anaphoric usage of SO-series.

---

※ 本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。  
審査委員：奥田邦男（指導教官）、今田滋子、細田和雄、羽生義正

## 1. はじめに

日本語の指示詞コ・ソ・アは、多くの場合日本語学習の入門期に導入される。しかし、中級や上級レベルに進んでも誤用が見られ、コ・ソ・アの習得の困難さを示している。筆者は、迫田(1992a)において日本語学習者によるコ・ソ・アの習得研究を行い、初級、中級、上級の各レベルの習得傾向や学習困難点などを明らかにした。

本研究は、その結果をふまえてさらに日本語学習者の習得過程の特徴を探るために、穴埋めテスト調査によって、日本語学習者による第二言語(L2: second language)としてのコ・ソ・ア使用の習得状況と、日本人児童による第一言語(L1: first language)としてのコ・ソ・ア使用の習得状況を比較し、それらの類似点と相違点を明らかにする。そして、日本語学習者にとって習得が困難な指示詞の用法はどんな用法なのかを探る。

## 2. 指示詞コ・ソ・アの習得に関する先行研究

### 1) L1 習得における研究

佐久間(1936)は、コ・ソ・アの研究の中で日本人の幼児の言葉にソ系の語が用いられないという指摘をした。このことを裏付けるのが、久慈・斎藤(1982)の研究である。二人は、1歳から2歳半の幼児24人を対象に8か月間、一週間に一度彼らの母親に指示詞を含むダイクシスの表現を観察してもらい、それらの表現がいつ頃現れるのかを研究した。コ・ソ・アの出現は、「ここ・これ」が大体1歳半頃、「あっち・こっち」が1歳9か月であった。それに対して、ソ系は2歳4・5か月に「そこ・それ」が出現すると報告している。コ・ソ・アを含むダイクシス全般の傾向としては大体1歳後半からコ・ソ・アド語や動詞が出現し始め、2歳後半になると、ほとんどの語が使えるようになることを明らかにした。さらに、各次元におけるコ・ソ・アド語の獲得順序を以下のように提示した。(p.234)

場所次元	ここ > どこ ≒ そこ ≒ あそこ
もの次元	これ > あれ > どれ ≒ それ
指定次元	この > あの ≒ どの ≒ その
方向次元	あっち ≒ こっち > どっち ≒ そっち

子供と大人の指示詞コ・ソ・アに関する比較研究はコ・ソ・アの使い分けより、認識や理解の研究が中心である。斎藤(1981)は、2・3歳児における指示代名詞の理解について調査し、幼児が現実空間で指示代名詞によって大人と同様の心理的空間を形成するのか

どうかを研究した。一つの部屋の中の三箇所に入形を置き、実験者と幼児の位置関係を同側条件・逆側条件として、幼児に実験者の指示に従って花やくしなどのプレゼントをどの人形に与えるかという実験を行った。それによると、幼児は中距離の「ソ」を「コ」や「ア」の領域に組み込んで理解しようとしていることが分かった。先のコ・ソ・アの発達研究の幼児はコ・アを習得し、ソ系の語は1年ぐらい遅れて出現するという結果との関連が考えられる。

指示詞コ・ソ・アを照応という観点から、文脈の中で子供がどの程度コ・ソ・アの指示内容を理解しているかという能力の発達について研究を行ったのは、寺津(1983)である。小学校3・4年の国語の教科書から問題文を作成し、名詞類・述部類・文類のタイプ別に先行詞が文脈に明示されているものとされていないものでその理解が正しくおこなわれているかどうか、小学校3～6年、中学校1・2年、高校生、大学生を対象として調査を行った。その結果、子供が大人と同様に指示内容を正確に理解できるようになるのは、小学校6年から中学校1・2年の間であることを明らかにした。

伊藤他(1987)は、寺津の研究を基に、指示語を含む文脈の理解に関して聴覚障害児(小学校2年・4年・6年、中学校2年、成人)と健聴児(小学校4～6年、中学校1～3年、高校1～3年)を対象に調査を行った。その結果、健聴児では明示的な先行詞をもつ名詞類照応の習得が最も早く、その時期は小学校2年から4年の間であること、先行詞が明示的でなかったり、複雑な内容であれば、中学校2年の段階でも理解が困難であることがわかった。

### 2) L2 習得における研究

日本人のL1としてのコ・ソ・ア習得の研究に比べ、日本語学習者のL2としてのコ・ソ・ア習得に関する研究はほとんど無い。これは、コ・ソ・ア習得に限らず、L2としての日本語の習得研究自体が最近やっと緒についたばかりで、多くの部分が依然として未開拓であることによる。

コ・ソ・アの習得に関する研究としては、学習者の誤用を研究の動機として、コ・ソ・アを日本語学の観点から研究する場合と、学習者の母語の指示詞と比較を行う対照研究の場合が多い。

前者の例としては、堀口(1978)が挙げられる。堀口はある留学生の作文の誤用から、それまでの指示詞の通説に対して、ソの領域に対する考え方や、現場指示と文脈指示の二用法でしかとらえられなかった指示詞の用法について新たな見解を示した。堀口は、まず

ソは聞き手の領域を指すという従来の考え方から、話し手の領域以外のものを冷静に指すという新たな考え方を示し、さらにこれまでの現場指示・文脈指示の用法だけでなく、知覚指示・絶対指示・観念指示の三用法を新たに加えて提示した。

後者の例としては、宋晩翼(1992)がある。宋は韓国人の日本語学習者へのアンケート調査を基に、韓国語と日本語の指示詞の対照研究を行い、プロトタイプ的な観点からの指示詞の用法を分類し、韓国語と日本語の指示詞の共通点を相違点より先に提示して、日本語教育への指示詞指導を段階的に行うことを提案した。

コ・ソ・アの習得研究としては、迫田(1992a)があり、60人の日本語学習者への1時間のインタビュー調査によって非現場指示用法の習得を調べ、その結果学習レベルが上がるにつれてコ系とソ系の習得は進むこと、学習困難点はソ系とア系の使い分けであること、母語の指示体系に日本語と同様、三つの指示形態素がある学習者(韓国人・フィリピン人など)は、二つの指示形態素がある学習者(中国人・アメリカ人など)に比べ、習得が若干進んでいることが分かった。

以上、指示詞コ・ソ・アの習得研究についてL1とL2のそれぞれの場合の先行研究について概観した。しかし、本研究を進めていく上でいくつかの問題点があることが分かった。

一つは、日本人のコ・ソ・ア習得研究では対象が幼児中心に限られていること、対象が児童や中高校生の場合は研究内容がコ・ソ・アの使い分けではなく、文脈理解であることである。寺津(1983)は、子供が大人と同様にコ・ソ・アを理解するのは小学校6年生以降であると結論を出しているが、コ・ソ・アの使い分けについても言えるかどうかは疑問である。したがって、児童が成人と同様にコ・ソ・アを正しく使い分けられるのかどうかを調べる必要がある。

もう一つの問題点は、コ・ソ・アの習得研究といってもそれぞれの用法に関する習得研究ではなく、幼児ではコ・ソ・アの形態素の発話の発達研究、児童では文脈理解、照応の研究がほとんどであるため、コ・ソ・アの使用、使い分けに関して詳しい結果を得ることができないという問題である。

そこで本研究ではこれら二つの問題をふまえ、明確なコ・ソ・アの用法に基づいて、日本語学習者と日本人児童のコ・ソ・アの使い分けに関する調査を行う。

### 3. コ・ソ・アの使い分けに関する穴埋めテスト調査

#### 1) 調査の目的

本研究では、前節の問題点をふまえ、小学生児童(1

年・3年・6年)と日本語学習者(中級レベル・上級レベル)にコ・ソ・アの使い分けに関する穴埋めテストを行い、それらの習得傾向を探り、それぞれの習得段階の特徴を明らかにすることを目的とする。調査対象を小学生児童1年・3年・6年としたのは、L1習得の先行研究において、子供が成人と同様に指示内容を把握するようになるのは小学校6年か中学校1・2年であるという報告に基づいて、それまでの習得過程を観察し、先の報告を検証するためである。

日本語学習者に関しては、迫田(1992a)の研究結果をふまえて対象を次のように限定した。

初級レベル学習者は文脈指示のような用法に関しては、ほとんど習得されていないという結果とテスト内容の理解が一部困難であろうという予測に基づき、中級レベルと上級レベルの日本語学習者のみに限定した<sup>2)</sup>。また、母語の指示体系に二つの形態素がある二項指示体系の学習者と、三つの形態素がある三項指示体系の学習者では習得に差が見られたという結果に基づき、学習者の母語指示体系の違いが調査結果に影響を与えないようにするために、本研究の対象を二項指示体系の母語の学習者に限定した。

#### 2) 調査の内容

従来の研究では、多くの場合現場指示か文脈指示かの用法分類でのみ調査が行われていた。しかし、実際の言語使用では、実にさまざまな状況で使用されており、コ・ソ・アの習得を探るためにはさらに明確な指示詞用法の分類に基づいた調査が必要になってくる。迫田(1992b)では、日本人が実際の言語活動でどのようにコ・ソ・アを使用しているかについて色々な場面での自然会話を録音し、用法を再検討して新たな分類を行った。本研究では、その分類を以下のようにまとめて指示詞用法とし、調査項目の内容を作成した。(参考資料を参照)

- ① 現場指示用法：話し手が現場にある指示物を直接に聞き手に対して指す用法である。
- ② 単純照応用法：話し手や聞き手の経験や心理的な状況に関係なく、照応的に先行詞を指示する。例えば「この話知ってる？山田先生と鈴木先生が結婚する話。」この場合の「この」は後ろの内容を指し、話し手と聞き手の関係や心理状態で「その」や「あの」には変わらない。
- ③ アの文脈指示用法：話し手と聞き手の共有体験や知識などを指示する。
- ④ ソの文脈指示用法：話し手が導入した対象を聞き手が知らない場合、あるいは対話相手が

導入した対象を話し手が指示する。

- ⑤ 観念・ストラテジー用法：観念指示用法とは、話し手が独白的に過去を回想したり、話し手の中にある漠然とした観念を指す用法。例えば、懐かしい音楽を聞いて、「あの頃は僕も若かったなあ。」の場合の「あの頃」は、話し手の観念の中にある、ある時期を指している。
- ストラテジー用法とは、話し手が言いたい言葉が見つからず、言い淀んだ時に使ったり、言いにくい時に「あれ」という曖昧な表現で内容を指す時の用法である。例えば、前者では「おいしい酒と言えばあれだよねえ、賀茂鶴だよねえ。」、後者では「先日の取引の件ですが、今日のご返事を頂かないとあれなんですよねえ。」の「あれ」である。観念用法もストラテジー用法も話し手と聞き手との関係ではなく、話し手の中にある指示対象を漠然と指すという点で共通していると考えられるので、統合して一つの用法にした。

なお、②～⑤は、①の現場指示用法に対して、非現場指示用法としてまとめられる。

コについては、文脈指示用法は主に文章の中で多く用いられ、会話の中で使用される場合は特に相手の注意をひきたい場合や、特定の主題について話を進める場合などに限られるため、調査内容には加えなかった。

### 3) 調査の対象

日本人児童：1年生（6～7歳）	100名
3年生（9～10歳）	100名
6年生（11～12歳）	100名
(1992年7月19日実施)	

日本人成人：	
大学生	58名（1992年9月19日実施）
一般人	42名（1992年10月24日実施）

日本語学習者：大学・専門学校生 73名  
各レベル別の母語別被験者の内訳は、以下の通りである。（1992年10月～12月実施）  
（1993年9月実施）

中級レベル学習者（計48名）：  
中国語42名・英語4名・ドイツ語1名  
ヒンディ語1名

上級レベル学習者（計25名）  
中国語15名・英語6名・ドイツ語2名

### 4) 調査の方法

1. 調査項目26の穴埋めテストを作成し（各項目の問題の指示詞用法は、参考資料と共に明記）、コ・ソ・アから選択し、記入させる<sup>2)</sup>。
2. 日本人成人の回答で最も高い割合を示した選択肢の指示詞を正答とし、他の学習者（日本人児童および日本語学習者）が同じ指示詞を選択した割合を算出し、それを正答率とする。
3. 要因を学習レベルで、小学校1年・3年・6年・日本人成人・中級レベル日本語学習者・上級レベル日本語学習者の6つに、指示詞用法で、現場指示・単純照応・アの文脈指示・ソの文脈指示・観念ストラテジー用法の5つに設定する。

### 5) 調査の結果

コ・ソ・ア使用のアンケート調査から正答率を算出した結果を図1に示した。（図1参照）

日本語学習者と日本人児童、小学校1年、3年、6年および日本人成人の学習レベルの要因(6)と、指示詞用法の要因(5)の二要因の分散分析を行った。その結果、学習レベル ( $F(5,467)=91.2, p<0.001$ ) と、指示詞用法 ( $F(4,1884)=91.2, p<0.001$ ) の主効果が有意であった。また、学習者レベル×指示詞用法の交互作用も有意であった ( $F(20,1868)=12.7, p<0.001$ )。交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った結果、成人レベルの指示詞用法間以外は全て有意差が見られた ( $p<0.001$ )。ライアン法による多重比較（有意水準5%）を行ったところ、以下の結果が得られた。

#### (1) 現場指示用法について

現場指示用法における学習者レベル間では、小学校1年生とその他の学習レベル間において有意差が見られており、1年生は正答率が最も低かった。

#### (2) 単純照応用法について

単純照応用法における学習者レベル間では、上級レベル学習者と小学校3年生の間、上級レベル学習者と小学校6年生の間、上級レベル学習者と中級レベル学習者の間に、また中級レベル学習者と小学校3年生間に有意差が見られなかったが、それ以外においては全て有意差が見られた。この用法においても、最も正答率が低かったのは小学校1年生であった。

#### (3) アの文脈指示用法について

アの文脈指示用法においては、上級レベル学習者と

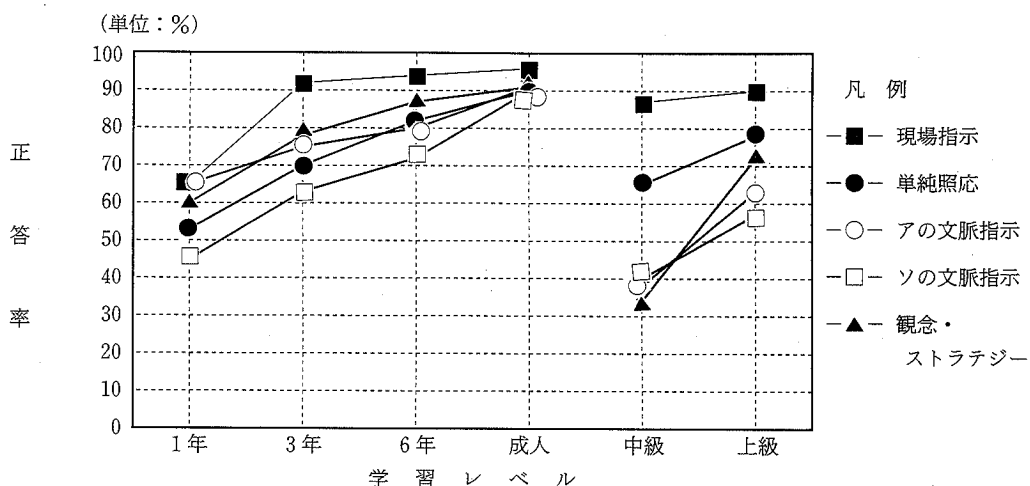


図1 学習レベル別指示詞用法の正答率

小学校1年生および3年生の間、また小学校1年生と3年生の間で有意差は見られなかったが、それ以外の全ての間で有意差が見られた。この用法では、中級レベルの日本語学習者の正答率が最も低かった。

(4) ソの文脈指示用法について

ソの文脈指示用法では、中級レベル学習者と小学校1年生の間と、上級レベル学習者と小学校3年生の間において有意差が見られなかった。しかし、それ以外においては全て有意差が見られた。正答率に関しては、中級レベル学習者と小学校1年生がほぼ同程度で最も低い割合を示していた。

(5) 観念・ストラテジー用法について

観念・ストラテジー用法においては、上級レベル学習者と小学校1年生の間、上級レベル学習者と小学校3年生の間と、小学校6年生と成人の間以外は、全て有意であった。この用法では、中級レベル学習者が最も低い正答率を示していた。

(6) 小学校1年生につて

小学校1年生における指示詞用法間では、現場指示用法と観念・ストラテジー用法の間、現場指示用法とアの文脈指示用法の間、アの文脈指示用法と観念・ストラテジー用法の間以外の全ての場合において有意差が見られた。正答率に関しては、ソの文脈指示用法が最も低い割合を示していた。

(7) 小学校3年生について

小学校3年生では、単純照応用法とアの文脈指示用法およびソの文脈指示用法および観念・ストラテジー

用法の間と、アの文脈指示用法と観念・ストラテジー用法の間以外の場合において全て有意差が見られた。正答率を見ると、1年生で低い値を示していたソの文脈指示用法も60%以上となり、他の用法も正答率が70%前後から90%と高い値を示していた。

(8) 小学校6年生について

小学校6年生においては、アの文脈指示用法と単純照応用法、ソの文脈指示用法、観念・ストラテジー用法のそれぞれの間において、また単純照応用法と観念・ストラテジー用法の間以外の全ての場合において、有意差が見られた。そして、全ての用法の正答率は70%から90%という、高い値となっていた。

(9) 中級レベル学習者について

中級レベル学習者では、アの文脈指示用法とソの文脈指示用法と観念・ストラテジー用法のそれぞれの間には有意差は見られなかったが、それ以外の各用法間には全て有意であった。用法間の正答率を見ると、最も低いのは観念・ストラテジー用法で、次にアの文脈指示用法、そしてソの文脈指示用法と続く。また、最も正答率が高いのは現場指示用法で、最も低い観念・ストラテジー用法との値の差は50%以上であった。

(10) 上級レベル学習者について

上級レベル学習者においては、単純照応用法と観念・ストラテジー用法の間、アの文脈指示用法とソの文脈指示用法の間、また観念・ストラテジー用法とアの文脈指示用法の間、観念・ストラテジー用法とソの文脈指示用法の間以外の全てにおいて有意差が見られた。正答率に関しては、観念・ストラテジー用

法が72%と高くなったが、ソの文脈指示用法は57%、アの文脈指示用法は62%で他の用法と比べて、低い割合を示していた。

#### 4. 日本人児童と日本語学習者のコ・ソ・ア習得に関する考察

前節の結果から、日本人児童と日本語学習者のコ・ソ・アの習得状況を指示詞の各用法毎に考察し、両者の習得の類似点と相違点を探る。

##### (1) 現場指示用法について

学習者レベルが小学校1年生に関わる場合にのみ他の学習レベルとの有意差が見られ、小学校1年生の正答率が最も低い。日本人成人の正答率に近づくことが習得を意味するとするなら、1年生ではまだ現場指示用法は十分習得されているとは言えないことが分かる。しかし、小学校3年生では6年生や日本人成人のレベルとの有意差が見られず、正答率も日本人成人と同様に90%台を示していることから、ほぼ成人と同程度に習得がなされていると言える。従って、日本人児童が現場指示用法を成人と同程度に習得するのは1年生から3年生にかけてであることが分かる。

日本語学習者では、中級レベル学習者においてもかなり高い正答率(87.8%)を示し、上級レベル学習者の正答率(90.0%)と考え合わせると、日本語学習者はこの用法に関する限り、ほぼ習得していると言える。従って、眼前の事物を直接に指示するこの用法は、初級レベルの段階でほぼ習得していると考えられると言えよう。

##### (2) 単純照応用法について

日本人児童の場合、単純照応用法は1年生では正答率が51.8%とまだ低く、十分習得されているとは言えない。しかし、学年が進むにつれて正答率が高くなり、習得が進んでいることが分かる。小学校6年生になると正答率は82.4%と高くなるが、日本人成人との間に有意差が見られることから、6年生においてもまだ成人と同程度の習得とは言えず、この用法が習得途上であると考えられる。

日本語学習者の場合、単純照応用法は他の非現場指示用法(ソやアの文脈指示用法、観念・ストラテジー用法)に比べると、中級レベル学習者でも正答率が64.6%と高い値を示している。そして、上級レベルに進むにつれて、正答率はさらに高くなり、習得が進む。しかし、上級レベル学習者と日本人成人の間に有意差が見られることから、日本人児童と同様未習得の段階

であると言える。日本語学習者と日本人児童を比較すると、中級レベルでは小学校3年生と、上級レベルでは小学校6年生とほぼ同程度の正答率が見られ、それぞれのレベルの間に有意差が見られないことから、中級レベルの学習者は小学校3年生と、上級レベル学習者は小学校6年生と同程度の習得が進んでいると考えられる。

##### (3) アの文脈指示用法について

日本人児童の場合、アの文脈指示用法は単純照応用法と同様に1年生でも正答率の値は低くなく、習得がある程度進んでいると考えられる。学年が進むにつれて正答率も成人に近くなり、習得がさらに進むことが分かる。しかし、6年生と成人の間にも有意差が見られるので、単純照応用法と同様まだ習得途上であると言える。

日本語学習者の場合は、アの文脈指示用法の正答率は中級レベル学習者で38.9%と、かなり低い値を示し、中級レベル学習者にとって、この用法は習得されにくいことが分かる。しかし、上級レベルに進むと正答率は62.7%となり、中級レベル学習者と上級レベル学習者の間に有意差が見られることから、中級から上級のレベルにかけて習得が進んでいることが分かる。

日本語学習者と日本人児童を比較してみると、上級レベル学習者と小学校1年生の間、上級レベル学習者と小学校3年生の間に有意差が見られないことから、上級レベル学習者が小学校1年生や小学校3年生と同程度に習得が進んでいることが考えられる。

##### (4) ソの文脈指示用法について

日本人児童では1年生・3年生・6年生と学年が進むにつれてソの文脈指示用法の正答率は伸びているが、他の指示詞用法に比べるとどの学年においても正答率は最も低い。アの文脈指示用法と比べた場合、両者の間に1年生と3年生では有意差が見られたが、6年生では見られなかった。1年生や3年生ではソ系の文脈指示用法の方が、ア系の文脈指示用法よりも習得が困難であることが考えられる。6年生では、ソ系とア系の両方の文脈指示用法に有意差は見られなかったが、しかし成人との間において有意差が見られた。したがって、6年生ではソ系の文脈指示用法はア系の文脈指示用法および単純照応用法と同様、習得の途上であると言える。

日本語学習者の場合、正答率では中級レベル学習者が40.5%、上級レベル学習者が57.7%と高くなっており、両者の間に有意差が見られることから、中級から上級にかけて習得がある程度進んでいると考えられる。

日本語学習者と日本人児童を比較すると、中級レベル学習者は1年生と、上級レベル学習者は3年生との間に有意差が見られなかった。したがって、中級レベル学習者は1年生、上級レベル学習者は3年生と同程度の習得であることが分かる。

#### (5) 観念・ストラテジー用法について

日本人児童では、小学校1年生でも非現場指示用法の中で、アの文脈指示用法と同程度の高い正答率を示している。学年が進むにつれて正答率は高くなるが、6年生と成人の間に有意差が見られないことから、ほぼ6年生で成人と同程度の習得を示していると考えられる。したがって、観念・ストラテジー用法は小学校3年生から6年生の間で習得がなされると考えられる。

日本語学習者では、中級レベル学習者においては正答率が32.3%と低い値を示している。テストが三肢選択からの記入形式であることを考えれば、この値は中級レベル学習者がほとんどこの用法を習得していないことを示すと考えられる。しかし、上級レベルになると正答率は72%と高くなり、急速に習得が進むという過程を示していることが分かる。日本語学習者にとって中級レベルから上級レベルにかけて、最も急速に習得が進むのは、この観念・ストラテジー用法のようである。

#### (6) 日本人児童について

小学校1年生では、日本人成人と比べてどの用法も正答率があまり高くなく、コ・ソ・アの各用法が習得されているとは言えない。コ・ソ・アの発話は先行研究でも述べたように、1歳半から2歳半で出現することが観察されているが、成人と同様にコ・ソ・アを使い分ける程度に習得するのは小学校1年生でも困難であると考えられる。

しかし、学年が上がるに従ってどの用法も習得が進み、現場指示用法は他の非現場指示用法に比べて、小学校3年生のレベルで日本人成人と同程度の正答率を示し、1年生から3年生の間に習得がほぼ完成される。

非現場指示用法については、どの用法も学年を追って習得が進むが、現場指示用法に次いで習得されるのは観念・ストラテジー用法であろうと思われる。小学校6年生と成人のレベルの間で有意差が見られないので、6年生において観念・ストラテジー用法はほぼ習得が完了していると考えられる。

アの文脈指示用法・ソの文脈指示用法・単純指示用法については、小学校6年生になっても成人と同程度の習得には至らず、習得の途上であると言える。従って、これらの用法の完全習得は小学校6年生以降であ

ると予測される。寺津の先行研究の結果では、子供が大人と同様にコ・ソ・アの指示内容を正確に理解ようになるのは、小学校6年生から中学校1・2年生であると報告しているが、コ・ソ・アの使用に関してアの文脈指示用法、ソの文脈指示用法、単純指示用法についても同様の可能性が考えられる。

#### (7) 日本語学習者について

現場指示用法だけが中級レベルですでに習得されており、日本語学習場面における現場指示用法の導入以降初級レベル学習者もほぼ習得が完了するのではないかと考えられる。

日本語学習者にとっては、非現場指示用法の中では単純照応用法が他の用法と比べて正答率が高く、習得されやすいようである。アの文脈指示用法、ソの文脈指示用法、観念・ストラテジー用法については、中級レベル学習者にとって正答率が低く使い分けが困難であるが、上級レベルになるとそれぞれ習得がある程度進む。中でも観念・ストラテジー用法は習得が進むのが際立っている。しかし、非現場指示用法に関してはどの用法も成人のレベルには習得されていない。

中級レベル学習者では、単純照応用法とソの文脈指示用法に関しては小学校1年生と同程度、上級レベル学習者では、非現場指示用法全てに関して小学校3年生と同程度の習得しかなされていない。上級レベル学習者でも小学校3年生と同程度の習得であるということ considering すれば、やはりコ・ソ・アの非現場指示用法はL2学習者にとって習得困難であると言えるのではないだろうか。

中級レベルの日本語学習者にとって、観念・ストラテジー用法がほとんど習得されていないのは何故なのか、上級レベルに進むとこの用法は他の用法に比べて急速に習得が進む原因は何か、日本語学習者の対象を三項指示体系の母語話者で行った場合の結果はどうか、またコ・ソ・アの使い分けを穴埋めテストではなく、自然発話の調査で行った場合はどうか等、多くの解決すべき問題点が残される。今後の課題として、研究を進めていきたい。

## 注

- 1) 中級レベル学習者と上級レベル学習者のレベル分けは、大学や専門学校における所属クラスに従った。
- 2) 日本人児童に関して、穴埋めテストの内容は変えていないが、小学校1・3年生に関しては文字の大きさや漢字の使用を考慮して作成した。  
活字の大きさ：1年生・3年生 14ポイント

6年生・成人・日本語学習者10ポイント  
漢字使用：1年生には漢字は使わず、分かち書きにした。  
3年生は2年生までの漢字を使用した。  
6年生は5年生までの漢字を使用した。  
成人、日本語学習者の場合は6年生と同様。

## 参考文献

- 伊藤淳子他(1987)「指示語を含む文脈の理解に関する発達的研究」『横浜国立大学教育学紀要第27集』横浜国立大学教育学部
- 金水敏・木村英樹・田窪行則(1989)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』3(日本認知科学会)講談社
- 久慈洋子・斎藤こづえ(1982)「子供は世界をいかに構造化するか」『言語の社会性と習得』編者秋山高二他, 文化評論出版
- 佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』厚生閣復刊(増補版)
- 正保勇(1981)「「コ・ソ・ア」の体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所
- 斎藤こづえ(1981)「2, 3才児における指示代名詞の理解」日本教育心理学会第23回総会発表論文
- 迫田久美子(1992a)「日本語学習者による指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」『平成3年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄』広島大学教育学研究科
- 迫田久美子(1992b)「話し言葉における指示詞コ・ソ・アの研究」『教育学研究紀要第38巻』中国四国教育学会
- 宋晩翼(1991)「日本語教育のための日韓指示詞対照研究」『日本語教育75号』日本語教育学会
- 寺津典子(1983)「談話における照応表現—照応に関する言語能力の発達について—」『言語』vol.12, No.12, 大修館書店
- 野地潤家(1973)『幼児期の言語生活の実態II』文化評論出版
- 堀口和吉(1978)「指示詞の表現性」『日本語・日本文化8』大阪外語大学
- 堀口和吉(1991)「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』vol.9, 3月, 明治書院
- Chomsky, C. (1969) *The Acquisition of Syntax in Children from Five to Ten*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Corder, P.S. (1967) "The Significance of Learners' Errors" *IRAL*. vol.V/4.

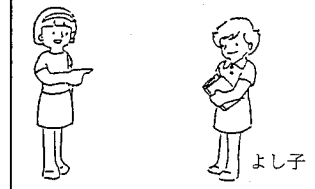
- Corder, P.S. (1983) "A role for the mother tongue" (ed.) Gass, S. & Selinker, L. *Language Transfer in language learning*. Newbury House Publishers, Inc.
- Ellis, R. (1986) *Understanding second language acquisition*. Oxford University Press.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge University Press.
- Selinker, L. (1972) "Interlanguage" *IRAL*. vol. X/3.
- Selinker, L. (1992) *Rediscovering Interlanguage*. Longman.

## 参考資料

穴埋めテスト内容(用法別に一部を抜粋)

### 現場指示用法

- 1)~6)( ), よし子ちゃんの本?(文は全て同じ)  
3)( ), よし子ちゃんの本?



### 単純照応用法

- 18) 医者：熱が下がらなかったら、( ) 時また来てください。  
22) 先生：「雨，雨，ふれ，ふれ…」みんな、( ) 歌，知っていますか?

### アの文脈指示用法

- 12) 山田：きのう，ドリアンっていう果物を食べたよ。  
いとう：ぼくも知ってるよ。( ) はくさいけど，おいしいよねー。  
23) あき子：私，学校で一番好きなのは山田先生。  
ゆり子：私も。( ) 先生，とてもやさしいね。

### ソの文脈指示用法

- 9) こども：お母さん，赤ちゃんはどこから来るの?  
お母さん：うーん，( ) はむずかしいねー。  
14) お母さん：駅前のパン屋でクルミパンというのを売っているから( ) を買ってきてくれる?

### 観念・ストラテジー用法

- 11) お父さん：(新聞を手持っている絵)  
( ), どこにある?  
お母さん：何ですか?  
お父さん：ほら，きのう買ったメガネ。  
13) 田中：ごみは決まった時間までに出してください!  
い! そうしないと，( ) なんですよねねー。  
すず木：すみません。